

られた時間内に出来るだけ効率よく踏査するには、移動時間を節約するために高速道路を有効に利用するのがよい。地域による差はあるものの、今や中国の高速道路は年間二〇〇〇―三〇〇〇kmという驚異的な建設速度で伸びており、各分冊は刊行時点で開通している高速道路しか記していない。

本圖を用いてフィールド調査を効率よく行うためには、高速道路延伸の最新情報を入力しておくことが欠かせない。

既刊八冊では、例えば『天津分冊』が三七頁の分量であるのに對して『陝西分冊』は一八八〇頁とおよそ六倍近くもあり、各冊には内容的な密度の濃淡がかなりある。それぞれの地域の歴史的背景とそれに伴う遺址の分布の多寡による當然の結果ではあるが、各分冊の利用度には大きな格差があることを知っておく必要がある。また近刊になるほど価格が高くなっており、今後の續刊の価格が大いに気懸かりである。『陝西分冊』は全三冊の巨冊ではあるが、七二〇元というのは日本で購入することを考えると、あまりにも高額に過ぎるというのが筆者の率直な思いである。

Gordon Whitteridge

Charles Masson of Afghanistan

稲 葉 穰

本書は、アフガニスタンおよび北西インド地域の古代史に興味を持つ者であれば一度は名前を聞いたことがあるであろう探検家、考古學者（好古家という方が相應しいかもしれないが）チャールズ・マッソンの評傳である。實は本書の最初の出版は一九八六年のことであつたが、それほど部數が出回っていなかったのか、筆者は初版時には入手することが出来ずにいた。今回の再刊は、幾分かは近年アフガニスタンに世界の注目が集まっていることのおかげなのだろう。一九世紀における最初のグレート・ゲームの渦中にいたマッソンの生涯が、二〇世紀のグレート・ゲームの悲惨な結果を我々が目にしつつある今、あらためて紹介されることを、時宜を得たと形容すべきなのか、あるいは皮肉なことと見るべきなのか。

著者であるGordon Whitteridge卿は長くイギリスの外交官をつとめた人物であり、一九六五年から六八年の三年間、アフガニスタン大使としてカーブルに駐在したのを最後に引退した。その後はThe Anglo-Thai SocietyのChairをつとめ、またSociety for Afghan Studies (後のSociety for South Asian Studies)のメンバーでもあつたが、残念ながら一九九五年に亡くなっている。

本文は一八八頁からなり、それが一八の章に分けられているから、平均すると一章あたり大體一〇頁強といったところ。この構成からわかる通り、どちらかというと一般向けに書かれた、日本でいえば「新書」のような性格のものであろう。有り難いことに英語も随分と平明で讀みやすい。卷末には簡略な注釋と參考文獻表、索引が附されている。

本書の敘述はマッソンの生涯をおつて時代順に進められ、當時の時代背景や考古學的知識の有り様に關する説明が適宜その中に挿入されている。以下、マッソンの生涯の劃期にしたがつて、便宜的に四つの時期に分けて内容を紹介する。

一 一八〇〇年——一八二六年

第一章から第四章にあたる。ここではマッソンの生い立ちから、彼がアフガニスタンに向かうまでの事情が語られる。一八〇〇年ロンドンで生まれたジェームズ・ルイスが、二一歳でイギリス東インド會社の砲兵隊に入隊するまでの事情はほとんどわかっていない。ベンガル第一師團第三大隊の一員として六年間を過ごした後、一八二七年にこの若者は軍から脱走して西へ向かった。この時以降、彼は脱走兵としての來歴を隠すため、ケンタッキー出身で世界を旅するアメリカ人チャールズ・マッソンと名乗ることになる。

マッソンが旅した頃、アフガニスタンおよびインドの情勢は次のようなものだった。すなわち、ラホールにはランジット・シン率いるシーク勢力が陣取り、イギリスと協定を結びつつ勢力を擴大しつつあった。前世紀の末にアフガニスタンを建國したドゥッラーニー朝はアフマド・シャーの死後はやくも分裂し、四半世紀におよぶ抗争を繰り返してきていた。この内戦の中で勢力を伸ばしてきたのがバラクザイ部族であるが、バ

ラクザイ内部でも対立があり、ドリスト・ムハンマド・ハーンの統治も不安定なものであった。一方イギリスは南下をはかるロシアに對抗するために、カスピ海からインドス河にいたる地域に關わる軍事・政治・經濟・地理情報の組織的収集を開始しつつあった。一八二九年マシヌハドからヘラートを經てスィンドに到達したアーサー・コノリー、ブハラ旅行で知られ、後にマッソンと深く關わることになるアレクサンダー・バーンズ、一八四〇年にヒヴァを訪れたジェームズ・アボットとリッチモンド・シェークスピアなど、皆マッソンの同時代の人々である。またヘンリー・ボッティンガー大佐はスィンド地域の本格的踏査を行ったが、それは可能ならインダス河に蒸氣船を運航させようという計畫の下準備だったと言われる。

二 一八二七年——一八三三年

第五章から第一章においては、アフガニスタンに居を構えたマッソンが行った遺跡調査と遺物収集の詳細が語られる。

マッソンの最初の旅は、一八二八年、ペシャーワルからジャラーバード、カーブ

ル、ガズニ、カラバーク、カンダハールを巡り、そこからクエッタ、ボラン峠を經てシカルプールに至る約半年間のそれであった。この旅の途中、ほぼ文無し状態で徒歩の旅を續ける物好きなイギリス人は、ほとんどの場合アフガン人達から好意的に迎えられた。著者は、いかなる階層の人々ともすぐに親密になることができたことこそ、マッソンの天賦の才能であったのだと述べている。

一八三二年カーブルに戻ったマッソンは、アルメニア人街に居を定める。そして、以後の精力的な探検と踏査の手始めとして、アフガン軍に同行してバーミヤンを訪れた。おそらくこの時彼が残したであろう

If any fool this high samooth

[cave] explore

Know that Charles Masson

has been here before

という落書きが、五三m大佛の上部にある石窟の壁で發見されたのは、一九三〇年代にフランス考古學調査團が同地を調査した時のことであつた。

一八三三年マッソンは、彼が「カウカシアのアレクサンドリア」に違いないと信

じたベグラームの地において大量の貨幣を発見した。これこそバクトリア時代以降、この地を支配した數多の王國の存在を語る遺物であつた。彼が収集した貨幣は總計八萬枚近くのにほり、現在でも當該地域の歴史研究のための重要な材料であり續けてゐる。

ついでマッソンがとりかかったのは、ジャララーバード地域、特にハッダのストゥーバ群と石窟の調査だつた。佛教遺跡としてのこれらの遺跡の重要性に關する彼の直觀の正しさは、その後の我が國やフランスによる本格的調査によつて證明されたのであるが、當のマッソンが、當時これらの遺跡群の性格に關する正しい豫測や理解を有していたわけではなかつたことは、専門的教育を受けたことのない人間としてはいたしかたないことであつただろう。

三 一八三四年——一八四一年

第二章から第七章では、第一次アフガン・アフガン戰爭に至るイギリスの對アフガニスタン政策の中でのマッソンの姿が浮き彫りにされる。

マッソンがカールを據點として自身の

調査研究を繼續している間に、彼を巡る状況は變化しはじめた。ルディアーナに駐留していたイギリス軍祕密情報局のクロード・ウエイド大尉が、マッソンを諜報員として雇ひ入れてアフガニスタン情勢に關する正確かつ豊富な情報を得ようと計畫したのである。この時ウエイドはすでに、マッソンがかつての脱走兵ジェームズ・ルイスであるという情報を入手しており、恩赦と名譽回復を條件として彼を情報提供者とすることに成功した。祕密主義でしばしば卑劣な手段を用いるウエイドに不満と嫌惡感を抱きながらも、マッソンはせっせとアフガニスタン情勢を報告し續けた。それはインド政廳の對アフガニスタン政策に重要な影響を與えたのだが、同時に、彼がもはやかつてのように親しくアフガンの友人達に受け入れてはもらえなくなるといふ事態をも招いた。

一方アフガニスタンを巡る情勢はさらに緊迫していった。ペルシアやロシアがアフガニスタンに觸手を伸ばしつつある中、ドースト・ムハンマド・ハーンはペシャーワル回復をはかつて出兵するも撃退され、また國內において彼を廢位しようといふ動

きが高まる。バーンズやマッソンの獻策にもかかわらず、イギリスは以前からの同盟相手であるランジット・シンとの兼ね合いから、結局ドースト・ムハンマド・ハーンを支持せず、ドウッラーニー朝の王であつたシャー・シュジャーをたててアフガン統一をはかろうとしていた。このような状況の中で、一八三八年、インド總督オークランドはアフガニスタン出兵を宣言するのであるが、マッソンはその直前、バーンズ一行とともにカールを離れペシャーワルへと逃れていた。そこで彼は自らの著書の執筆に勤しむが、存命中のインド政廳高官や行政官（彼の用語では“Politicals”）への實名をあげての批判が頻出するこの書は、イギリスにおいて出版を拒否されることになる。

休養をとつたマッソンは旅を再開すべく、カールを目指して、スインドからカラートへ向かつた。ところがカラートにおいてブラーフィ部族の反亂に遭遇し、行政官ラブデイ中尉とともに囚われてしまう。彼はイギリス軍との交渉のために解放されてクエッタに送られたが、あろうことか同地の行政官ピーン大尉により、反亂軍を手引き

した嫌疑をかけられ投獄されてしまう。その後の調査の結果どうにか解放されたものの、この事件はマッソンのその後の人生に大きな影を落とすことになった。ボンベイに到達した彼は、インド政廳に對して、カラートで奪われた所持品や大事な原稿の賠償と、クエッタにおける不當な扱いに對する謝罪を求めるが果たせず、訴追に本腰をいれるために二十年ぶりに祖國に戻ることにした。

四 一八四二年——一八五三年

最終章では歸國してからのマッソンの様子が語られるのであるが、それはあまり幸福なものではなかったようである。一八四八年、彼は二六歳年下のメアリー・アン・キルビーと結婚したが、一方でインド政廳との交渉は不調に終わった。カラートでの出来事以降、マッソンはちよつとしたことにも過敏に反應し、しばしば根據のない非難を他者に向けるようになったという。*Ariana Antiqua* においてマッソンの事蹟を紹介した H. Wilson との仲も、マッソンの被害妄想的思い込みによってこじれてしまった。

彼の主著 *Narrative of Various Journeys in Balochistan, Afghanistan and the Punjab* は一八四二年、Richard Bently 社から三巻本で出版された。この書を持つ地理・民俗・政治史に關する詳細な情報の價值は現在極めて高く評價されているが、出版當時はそこに示されたインド政廳關係者への攻撃的姿勢が激しい批判を呼び、それはおそらくマッソンの失意をより強くした。

その後のマッソンの足取りはあまりよくわからない。一八五三年一月五日、彼は五三歳で永眠し、その遺品は百ポンドでインディア・オフィスに買い取られ、その圖書室に收藏された。それらがカタログ化され、マッソンの生涯と事蹟に光があたるようになったのはやつと一九三七年のことであった。

以上本書の内容紹介、というよりはマッソンの生涯の極めて難駁な紹介を試みたが、本書の意義は「インド亞大陸の北西地域を探検したヨーロッパ人の中で最も謎にみちた人物」(本書一七頁)と言われるマッソンの生涯を、彼の著作や書簡、その他の資料を博搜して詳らかにしたことに盡きるで

あろう。本書以前、マッソンに關しては、*The Gates of India* (London, 1910) における Thomas H. Holdich の言及、一九七四年にカラチで再刊された *Narrative of Various Journeys* に附された Gavin Hambly の序文、および一九七五年にグラーツで再刊された同じ書に附されたイギリス近代史家 G. J. Alder の序文(ちなみに Whittieridge はこのグラーツ版を参照していないようである)くらいしか據るべきものがなかった。前述の通り一九世紀前半の北西インド、アフガニスタンに關するマッソンの記録は、イギリスおよびアフガニスタン近代史の資料としても、また考古・地理學的フィールドノートとしても、現在その價值が極めて高く評價されている。たとえば Warwick Ball による勞作 *Archaeological Gazetteer of Afghanistan* (Paris, 1982) には、アフガニスタンの遺跡二二八〇餘りがリストアップされているが、そのうちマッソンの著作がリファレンスとして擧げられている遺跡は一二五を數える。彼の記録は當該地域における現代のフィールドワーカーにとって極めて有用なガイドになってきたし、今後再開されるであろう調査においてもそ

うであるに違いない。それは未だ汲み盡くされていない豊かな泉のごときものと言えるかもしれない。筆者はそのような観點からもマッソンの旅行がどんな性格のもので、どのような状況の下で行われたのか、またマッソン自身がどのような人物であったのか、より詳しく知りたいと願っていたが、本書はその願いを大いに叶えてくれるものであった。

それにしても本書を通讀して思うのは、マッソンという人物の不思議さである。アルダー (*Narrative*, Graz 版、xv) も指摘しているが、「ロンドンの職工の息子で、

一兵卒にして脱走兵」たるジェームズ・ルイスと、「教養を持ち繊細で、多國語をあやつる旅行者であり、出會ったイギリスの高官達の多くに賞賛され好まれたチャールズ・マッソン」はまるで別人のように見えるし、またイギリスに歸つてからの「Mr. Z」(彼はしばしば自分のことをこう書きあらわした)もまた、マッソンとは別人のように見える。醒めた見方をするなら、専門的教育も訓練も受けていない、單なる好古家に過ぎなかったマッソンは、フィールドワーカーとして一九世紀のアフガニスタンという環境の中に身を置いた時のみ、

輝きを放つことができたということなのかもしれない。しかし、だからといってその輝きがいささかなりとも曇るわけではない。マッソンのように旅をし、マッソンのように正確に觀察し記録し、マッソンのようにアフガニスタンにとけこむことが出来たヨーロッパ人は、彼の同時代はおろか、その後も長くあらわれなかったのである。「アフガニスタンのチャールズ・マッソン」という本書の題名は、マッソンという人物のそのような生涯を端的にあらわしたものとも言えよう。

(Bangkok: Orchid Press, 2002, 199 pp.)